

2019 年度前期 授業改善アンケート集計結果に対する意見

—文芸学部—

文芸学部長 村瀬 鋼

今回の授業改善アンケートは、本学部については実施対象科目 346 科目（内、実施必須科目は 197 科目）中、314 科目（内、必須科目 190 科目）から回答が得られ、実施率は 90.8%であった。昨年度前期（345 科目中 323 科目の実施、実施率 93.6%）を下回る数字となり、必須科目についても実施率が少し下がっている（今回 96.5%、昨年度は 204 科目中 201 科目の実施で 98.5%）。とりたてて問題にするほどの低下ではないと思われるが、大学全体の数値と比べても若干低い数値となっているので、次期以降、実施率の回復を目指したい。

さて、集計結果についてであるが、まず、授業の質に関わる設問 3 から 11 に関しては、全て 4 点以上の値となっており、大学全体の平均値と比べても、他の三学部と比べても、高い数値となっている。昨年度前期と比較すると、各項目について小数点以下 2 位レベルの数値の僅かな増減はあるものの、全体的にはほぼ変わらずに、高数値を保っている。ここから判断して、文芸学部の科目は、従来通り、全体としては総じて十分に学生から好評価を得ており、概ね良好に運営されていると見てよいと思われる。もちろん、個々の科目に関しては、担当教員は、自身の担当科目について、自由記述をも含めたアンケートの結果を参考に、授業の改善に努めるべきであることは言うまでもない。

次に、受講者の授業への参加度に関わる設問 1、2、12 に関して見ると、出席率を問う設問 1 の 4.11（平均して、アンケート回答時まで 1~2 回程度の欠席に当たるか）は、昨年度 3.95 から上昇しており、よい傾向であると思われる。授業時間外の学習時間を問う設問 12 は、昨年度 2.58 と大差ない 2.55（平均して、一回の授業につき 0.5 時間程度の見当）である。これは、教員の実感からすれば違和感のない数値ではあるが、大学での学習に本来要求されている時間数からすれば憂うべき数値だと言えよう。また、授業中の努力の程度を問う設問 2 が、昨年度の 4.01 から 3.93 に低下しているのも気にかかるのである。教員としては、たんに宿題や課題を課すというにとどまらず、学生たちが授業内外で主体的・能動的に学習するよう、学生たちの関心や意欲を喚起する授業の展開をよりいっそう工夫していく必要があるだろう。

最後に、授業手法についての大問Ⅲと、授業を通じて身につけた資質・能力を尋ねる大問Ⅳを見ると、大学全体と比較して、本学部では、双方向的授業やアクティブラーニングを促す授業が相対的に多く、また授業を通じて学生は、知識・学力はもちろん、論理的思考力や語学力、発想力、俯瞰力、コミュニケーション能力など、多様な能力を身につけたことを（さしあたり大学全体と比較して相対的に）よく実感していると言えるだろう。これは好ましいことである。ただし、「数理的な能力」に関してだけ目立って低いのは、本学部らしいところではあるが、理数系教育を第二世紀の教育改革の三本柱の一つとして立てて

いる学園にあっては、少し考える必要もあるのかもしれない。

以上、今回のアンケートの結果は、全体としては、本学部の授業が従来通り十分良好に行われているであろうことを示すものであるが、個々の教員は、アンケートの結果を参考に、今後とも、特には学生たちの関心や意欲をいっそう喚起すべく、授業の改善に努めなければならないであろう。

以上